

銃口の中には天使か悪魔が住んでいる。どちらが見えるかで死後行く場所がわかる。

今回の標的は若い夫婦。

父親は組織専属の会計士だが横領を働いていたのが明るみにでた。

依頼内容<sup>オーダー</sup>は一家皆殺し、見せしめもかねている。

「撃たないでくれ！」

「お願い、子供だけは」

無視して引鉄を引いた。

一瞬だった。

全身で命乞いする夫婦の脳天に38口径の風穴があく。リボルバー銃の銃口から手向けの硝煙が上がる。

自らに訪れた突然の死が信じられず、愕然と目を剥いたまま、夫婦はゆっくりと後ろに倒れていく。

傍らに跪き、首に手を添えて脈をとる。両方とも事切れていた。

さて、どうしたものか。

気が重い後始末が残っている。

「あ……ああ……」

両親の間で震える幼い少年。

「母さん、父さん」

物言わぬ母親に縋り付き、息絶えた父親を揺さぶり、舌足らずに起きて起きてとせがむ。

床を踏んで最後の標的に近付く。

片手のリボルバー銃を持ち上げる。少年の顔に銃口を狙い定め、引鉄に指をかける。

しかし、少年は思いがけぬ反応をした。

瞬きもせず食い入るように銃口を凝視し、笑ったのだ。

紛れもない安堵の微笑み。

諦観でも達観でもない、救われた表情。

銃口の中に何を見たのか。

気が変わった。

銃を下ろして懐にしまい、改めて正面に跪く。

「一緒にくるか」

私には子供がいない。妻は妊娠が難しい体だ。しかし子供を欲しがっている。

「衣食住に不自由はさせない。成人するまで守り育てる」ただの気まぐれというには大胆なことをしている。一歩間違えば身を滅ぼすとわかっているのに、口は止まらない。

夫婦には他に身寄りがない。

少年は孤児院に送られる。

「お前が1人でも生きていけるように鍛え上げる」

「父さんと母さんを殺したくせに」

「仕事なんでね」

「お金欲しさに殺したの」

「働かなければ食べていけない。殺しは私の稼業だ」  
あどけない顔に純粹な憎悪が爆ぜる。

「決めるのはお前だ。一緒に来るか、ここで死ぬか」

両親の後追いを望むならそれもいい。幼子に酷な選択を迫っている自覚はあるが、他にどうしようもない。

見込み違いか。

密かな落胆を胸に秘め、俯いたきりの脳天に銃を擬す。

次の瞬間、毅然と顔を上げて彼は頷いた。

殺意と復讐心が滾る目で、私を睨み付けて。

「なんていうんだ」

最愛の父母に授かった名前を、重苦しく吐き出す。音楽のような響き。

私は陶然と目を閉じて、率直な感想を述べた。

「いい名前だな」

終始少年の目は潤んでいたが、涙は一粒も落とさなかった。

そして彼は、私の息子になった。

家に連れ帰ってすぐは色々大変だった。

「知人の忘れ形見だよ。事故で家族が死んで他に行くところがないんだ、うちにおいてやれないかな」

妻は私の説明をあつさり受け入れ、事故の生き残りの少年に大変な同情を示した。

「今日からここがあなたの家よ、どうか遠慮せず過ごしてね。何でも頼ってちょうだい」

妻に話しかけられた少年は驚きに目を見張り、殆ど言葉を返せない。

後で私にこっそり聞いてくる。

「あの人、あなたが何してるか知ってるの」

「いや、話してない。銀行員だと思ってる」

「だまして結婚したんだ。ばらしたらどんな顔するかな」

「子供の言うことなんて信じないさ」

「やってみなきゃわかんないだろ、あんたが使ってる拳銃を見せればいやでも」

「保管場所がわかるのか」

「うっ」

「それ以前にこの私からそうやすやすと得物を取り上げられるとでも？」

「ぐっ」

素直な反応にほくそえむ。からかい甲斐があるところがますます気に入った。

彼を息子として育てるのに際し、雇用主のマフィアにはある条件を突き付けられた。私はそれを呑んだ。

妻とはすぐうちとけた息子だが、一か月、半年、一年たっても私には心を開かなかつた。

仕事で家を空ける日は息子に留守を任せた。家にいる時は四六時中息子の視線を感じた。銃の隠し場所を突き止める魂胆か、隙を突いて両親の敵討ちを企てているのか。どちらにしる気配の隠し方がまるでなっていない。

先は長そうだな。

書齋で銃の手入れをしていると、扉の前を落ち着きない気配が行き来する。

油を染ませた布で銃を磨くのを中断し、明朗と声を張る。

「入っていいぞ」

扉の向こうで焦った気配。数呼吸後、遠慮がちにノブが回ってドアが開く。やはり息子だ。

書棚に犇めく蔵書とセピア色の地球儀、飴色の光沢を帯びた机。初めて足を踏み入れた書齋を物珍しそうに眺め、口を開く。

「殺し屋の部屋っぽくない」

「もともと父の部屋だからな。その名残りだ」

「父親も殺し屋だったの」

「想像に任せる」

皮肉つぽく口角を吊り上げれば、それに応じて息子がむくれる。

「足音たてないように気を付けたのになんでわかるのさ」

「付きつきりで見張つても無駄だ。お前の手が届く場所に銃をほつたらかすようなヘマはしない」

不満そうに立ち尽くす息子をあえて無視、リボルバー銃の点検を再開する。商売道具は常に万全の状態にしておきたい。

日頃は決して必要以上は近付いてこない息子が、真剣な面構えで一步踏み込む。

「撃ち方を教えてほしい」

「駄目だ」

「どうして」

「まだ体が出来上がってない、反動で肩が外れるぞ」

「大袈裟だよ」

「銃を手にする資格があるかどうかは銃が審判する」

謎かけのような発言に瞬き、息子の顔に疑問符が浮かぶ。私が意味不明な事を言つて煙に巻こうしていると断じ、まなじりをキツと吊り上げる。

「どーゆー意味だよ」

「銃口を覗いてみる」

「……」

「安心しろ。弾は抜いてある」

机においたりボルバーを息子の方へ滑らす。言われたとお  
り片目を眇めて銃口を覗く。

「真っ暗で何も見えない」

「残念、失格。まだ早いということだ」